

第 40 回日本交流分析学会中央研修会報告

テーマ「世界の TA、日本の TA」

平成 25 年 3 月 24 日 日本大学文理学部百周年記念館

発行
日本交流分析学会
教育研修委員会

平成 25 年 4 月 1 日

日本交流分析学会中央研修会は、今回第 40 回の節目を迎えました。またこの夏には国際大会と共同開催で第 38 回学術大会が開催されますが、その「プレリュード」の役割ももつ記念すべき研修会となりました。おかげさまで多くの参加者を得て成功裏に終了しました。以下、ご報告いたします。(文責は教育研修委員会にあります)

総合司会 吉内一浩先生 (東京大学)

* TA の誕生と発展～「エゴグラムから人格適応論」～

鈴木佳子先生 (東京経済大学)



Eric Berne

エリック・バーン (1910～1970) の生涯について、年表を眺めつつ、参加者自身の生きてきた時代と重ね合わせながら、興味深いお話を伺いました。

——地域で無料の診療所を開いていた外科医の父から治療者の姿勢を、教員や編集の仕事をしていた母から“書くこと”を受けついだエリック・バーン。精神分析家を目指していましたが、その思いはかないませんでした。しかし、それを機に新しい理論、TA (交流分析) が誕生

したのです。1950 年代はじめ、毎週夜に開かれていたセミナーには、新進気鋭の精神科医、心理学者、ソーシャルワーカーなどが集まり、TA の諸理論が討議されました。このセミナーが、1964 年の ITAA (国際 TA 協会) 設立へとつながっていきました。

エゴグラムを提唱したジャック・デュセイも初期からのメンバーで、1976 年日本交流分析学会第 1 回学術大会に招聘され講演を行いました。デュセイはこの夏の国際大会に 37 年ぶりに来日し、『自我状態のエネルギー変化を用いた理論—エゴグラムによる表現—』の講演を行います。

時代の変化とともに TA は発展を続け、1987 年には TA の教科書と言われる『TA TODAY』(イアン・ステュアート&ヴァン・ジョインズ著)が発刊されました。その後、発展した『人格適応論』も世界中で注目されています。



Jack Dusay



Vann Joines

* TA の心理療法理論～再決断療法と関係性 TA～

島田涼子先生 (人間総合科学大学)

心理療法としての TA の核心を、治療者としての体験とともに語られ、深い内容のお話でした。

——TA の理論をベースにゲシュタルト療法の技法を統合した「再決断療法」は、グルーディング夫妻 (米) によって開発された効果的な心理療法です。治療者は転移を引き受けず、クライアントの持っているパワーを引き出すことで主体的な変化を援助します。それは、「自律」をゴールとした契約に基づいて行われます。

しかし、自己感の混乱があるクライアントへのアプローチには異なった視点が必要であるとして、近年ハーガデン&シルズ (英) によって「関係性 TA」が提唱されています。そこでは、治療者はゲームを引き受け、クライアントが親の調律不全のために処理しきれなかった混乱を包み込み、また抱えることで、クライアント自身が破壊的な衝撃と捉えていた体験を受け入れられるようになる、とされています。

米国で生まれ発達してきた TA が、ヨーロッパ、アフリカ、南米、豪州、アジアなど世界中に拡がり、新たな発展をしつつ現在に至っています。この夏の「世界の TA と日本の TA の出会い」に、ぜひ立ち会って下さい。

* 日本の「交流分析」はどう展開されたか～精神分析の発展と比較して～

江花昭一先生 (神奈川大学)

バーンが「精神」の分析から「交流」の分析へと視点を画期的に転換した点の指摘に始まり、日本の交流分析の独自性、日本の精神分析の発展まで、難しいはずの内容を楽しく、分かりやすくお話していただきました。

——日本の交流分析は、1971年、九州大学心療内科初代教授池見酉次郎先生と杉田峰康先生を中心に導入されました。心理・看護・教育・産業・生活にも展開されましたが、主に心療内科領域での活用、すなわち心身症患者の治療を念頭に置いたものであることが特徴となりました。その患者には「自己の混乱」がみられがちなので、「大いなる自然に包まれ、生かされて生きる自己」の概念が必要とされ、また、患者と治療者が共有して使えるツールとしての「エゴグラム」の開発・創意工夫が行われることになりました。

さて、バーンの交流分析は当時の精神分析に裏打ちされ、関係性交流分析も現在の精神分析の発展に対応したものです。日本の精神分析は、古澤平作の「アジャセ・コンプレックス」論、土居健郎の「甘え」理論、北山修の「共視論」「見るなの禁止（幻滅とそれからの回復）」論など、「ごく早期の親子関係の安定」がテーマになっています。日本の交流分析も、このような展開を吸収したものでなければなりません。

以上より、「自己の混乱」を示す患者への対応、および日本の精神分析の果実の吸収を考えた交流分析の展開が求められていると考えられるのです。（北山修先生は、夏の大会で特別講演をされます）

講評

杉田峰康先生（福岡県立大学）

3名の演者の話を聞くと、自我心理学における「自我」の「自律性」を中心にしたものから、コフートの「自己心理学」、あるいはスターンの「自己感」論や「情動調律」論などが示す「自己」の「関係性」を中心にしたものに、交流分析（TA）の流れがシフトしていることがよくわかります。これらは、土居先生の「甘え」理論の枠内の議論であると考えられることもできるでしょう。精神分析を創始したフロイトは晩年病いと格闘し、交流分析を創始したバーンは若くして死去しました。コフートもアンナ・フロイトを自己対象としたが晩年は決別し、病いと格闘することになりました。このような点を「甘え」や新しい交流分析で検討することが、それぞれの理論の内容を理解するためにも、たいへん重要で、かつ興味深い点であると思います。



総合討論

吉内先生の司会で3名の演者の先生方、講評の杉田先生が壇上に上がり、相互討論、フロアとの活発なやり取りが行われました。末松理事、村上理事からの発言もあり、最後まで熱心な討議が行われました。

<アンケートから>

- ・TAの大きな流れが理解できた。
 - ・あらためて基礎理論を学びたい。
 - ・実際のワークを体験したい。
 - ・ケースへの応用を取り上げてほしい。
 - ・人格適応論 ・関係性TA ・契約 ・ゲームについて勉強したい。
- などのご意見をいただきました。

今後とも、日本交流分析学会活動および中央研修会へのご支援をよろしくお願いいたします。

<<日本交流分析学会第38回学術大会および国際大会のご案内>>

本大会会期 2013年8月15日～17日（前後に講習会） 会場 大阪国際会議場
 ホームページ 第38回大会 <http://ta38.jp> 国際大会 <http://2013itaa.com>
 大会スケジュール（下記の他に、国際大会企画のワークショップもあります）

8/13・8/14 講習会	8/15	8/16	8/17	8/18 講習会
TA101 (TA 基礎講座) Trudi Newton	基調講演 Trudi Newton	シンポジウム[傷ついた治療者] 江花昭一、野間和子、白井幸子	基調講演 Elana Leigh	Jack Dusay Karen Pratt Vann Joines
	ポスター発表	会長講演 杉田峰康、 特別講演 定籐規弘	特別講演 北山修	